



被爆と被曝 三つの現場で

高知の92歳 核開発「やめさせないと」

被爆と被曝。長崎、広島、太平洋の三つの現場に身を置いた男性がいる。高知県土佐清水市の横山幸吉さん(92)。長崎で被爆し、広島を通過して高知へ帰った。9年後、米国による太平洋のビキニ環礁での水爆実験でも被曝した。

横山さんの証言を収めた動画が5日、広島市で開かれた原水爆禁止日本協議会の世界大会で上映された。被曝は当時を語り、なかでも太平洋での被曝について「放ったらかしで、あんまりだ」と訴えた。

爆風で飛ばされ

14歳だった1944年、三菱重工長崎兵器製作所で働き始めた。週3日は職工の養成学校で学び、週3日は旋盤工として魚雷をつくった。山腹に掘られた長さ300メートルほどの「トンネル工場」が仕事場だった。45年8月9日午前11時2分。トンネル内の明かりが消えたと感じた瞬間、爆風で吹き飛ばされた。衝撃が収まった後、40メートル歩いてトンネルの外へ出ると街は火の海だった。

「新型爆弾だ」とすぐに思った。広島が攻撃されたのを新聞で読んでいた。トンネルを逆戻りして山へ逃げた。人の流れに加わって何時間も歩いた。夜は倒壊した建物から布団運び出して地面に敷いて寝た。周囲には負傷した兵隊や民間人がいて、混乱していた。翌日、友人を捜しに工場へ向かった。やけどを負った人が川で大勢しくなっていた。憲兵に呼び止められ、

負傷者を運ぶよう指示された。瀕死の人を駅へ運んだ。たくさん遺体をみた。「高知に帰ろう」。高知出身の友人と再会し、2人で汽車に飛び乗った。広島駅で汽車が止まった。駅舎は屋根が落ちていた。車窓から見えた街は焼け野原。水が漏れているタンクを見つければ、飛び降りて飲んだ。

連絡船と汽車を乗り継ぎ、土佐久礼駅へ。トラックの荷台に乗せてもらった。歩いたりした。四万十川にかかる橋のそばで「日本が戦争に負けた」と聞いた。その後、現在の土佐清水市で漁師になった。収入を増やそうと、遠洋へ出るカツオやマグロの漁船に乗るようになった。

漁船の知人が：

54年3月1日、第五福竜丸が、米国による太平洋ビキニ環礁での水爆実験で被曝した。このころ、横山さんが乗る第11富佐丸は赤道近くのインドネシア沖などで操業していた。

その年の10月、東京・築地へマグロを水揚げしようとした。放射線量を調べた検査官から、マグロを全て捨てるよう指示された。1日ばかりで沖合に戻した。横山さんは日本原水協の世界大会での証言動画で、

当時を振り返る。「被曝しよるとは、ぜんぜん言われていない。漁師だから毎日必ず1回は刺し身を食べた」

50歳を過ぎた頃からだ。マグロ漁船の知人が一人、また一人と亡くなっていくと聞いた。白血病やがんなどという。遺族に「太平洋での被曝が影響しているんじゃないか」と尋ねたが、「そんな話は聞きたくない」「人に知られたくない」と言われた。

横山さんは51歳の時、長崎での被曝により被曝者健康手帳を取得した。その後、高知・土佐清水で被曝者の会の代表を務めた。2016年に提訴されたビキニ被曝の国家賠償請求訴訟の原告に加わった。賠償は得られなかったが、船体などから放射線が検出されたため、判決では太平洋での被曝が認められた。

19年に胃がんを切除し、体調は万全ではない。現在は改めて国などを提訴したビキニ被曝訴訟の原告に加わっている。

戦後77年。今月7日に取材に応じた。「マグロを捨てさせられ、健康を害した漁船員が

何の補償も手にせず放っておかれた。国はあまりにも無責任だ」。核兵器の開発が続くことにも、「やめさせないといけない」と語気を強めた。

ロシアのウクライナ侵攻、緊迫する台湾情勢も気がかりだ。

「弱い者が手を組んでグループになれば、核をもつ大國だって戦争はできない。まだ戦争を止めようというグループの取り組みが足りないんじゃないか」

(嵯川大介)

(右から)
・横山幸吉さん(8月7日、高知県土佐清水市本町)
・ビキニ環礁で行われた水爆実験の巨大なキノコ雲(米軍撮影)
・広島市上空に広がるキノコ雲(米軍撮影)
・長崎市に投下された原子爆弾の爆発で上空に立ち上る原子雲(米軍撮影)